

大切なあなたのおこさんのために知っておいてほしいこと

奈良県総合医療センター小児救急科部長
竹田 洋樹

はじめに

保護者・幼稚園・小児科医は皆、何事もなくこどもが成長することを願っています。しかし、この3者それぞれの事情からのコミュニケーションが充分に取れずに我々（オトナ）の都合で逆にこどもを傷つけてしまうようなことがあるのではないかと普段の診察で感じることがあります。自分の反省も踏まえてそんなことを中心にお話ししたいと思います。

こどもは産まれるまでお母さんの子宮に守られています。生まれた瞬間に外気にさらされます。喜ばしい瞬間ですがその一方で試練が始まります。小児救急が診察を担当する感染やケガとの闘いの始まりです。

熱とかぜの話

熱が出ると心配ですよ。その心配はどこからくるのでしょうか。「熱恐怖症」という概念を1980年に小児科医のバート・シュミットが提唱しました。彼は『病院を受診する保護者の多くは38.9℃以上の熱に恐怖を感じ、熱によって脳障害やけいれんを起こすのではないかと過剰に恐れている。』と報告しました。この概念をわざわざ報告し、我々医師が注目したのは、医師からすると「ただの熱」も保護者の皆さんにとっては「怖い熱」。こどもの熱を心配する保護者と「大丈夫」としか言いようがない医師との間に感情のギャップがうまれるからです。例えば「こんなに高い熱があったら頭がおかしくなっちゃうよ」なんて言われたことのある方はいるんじゃないでしょうか。人は強い印象を受けた噂やニュースに心動かされ、その強い印象に目が釘付けになってしまうのです。実際のところ幼稚園に通っているぐらいの年齢のこどもの熱は命に係わる熱であることはほとんどないといつてよいです。

幼稚園児の熱はかぜによるものがほとんどです。幼稚園で問題になるのは「かぜをうつされた。」といったトラブルときいています。かぜは人から人につっていく感染症です。なので集団で生活する現在の社会生活様式では「絶対うつされないように」ということは不可能です。

ありがちな一つの例を紹介するとかぜをひきはじめのA君が鼻の穴をほじってそのままおもちゃで遊んだ。B君がそのおもちゃをA君から借りてあそんだあとそのまま鼻の穴をほじった。「うつした・うつされた」の成立です。皆さんご存知の通りこの一例のようにウイルスを手で触れるだけでなく、咳やくしゃみで放出された空気中を漂うウイルスも粘膜にくっつくと感染成立です。

どうしても「うつされた」がいやなら極端な話ですが極地で人や動物と接触しないで生きる、もしくは防護服を着て幼稚園で過ごすぐらいしか「かぜをうつされない」はできないでしょう。なので「うつした・うつされた」なんて無益なお話はもうやめましょうね。

かぜに抗生剤

幼稚園児の熱はほとんどが「かぜ」だということは先に書きました。皆さんが診察を受けた後、医師に「かぜですね」といわれることが多いと思います。そのあと「安静にして水分しっかりとってあげればいずれ自然に治るよ。ぐったりして様子がおかしかったり熱が5日以上続いたらまたおいで」といわれるか「抗生剤とかぜ薬と解熱剤とだすとくね。この抗生剤はよく効くんだよ。」どっちでしょう。抗生剤は細菌に効果のある薬です。ウイルスには効きません。そして「かぜ」原因はほとんどがウイルスです。細菌ではありません。「かぜ」という病気に抗生剤は必

要なんでしょうか？必要ないんです。

「かぜの肺炎予防に抗生剤」ということばも聞いたことがあるのではないのでしょうか。イギリスでかぜ患者 4000 人に抗生剤を処方したところ重篤な細菌感染症を予防できたのはそのうちたった 1 人という報告もあります。

かぜのときによく出される抗生剤の多くは「第三代セフェム系」という種類の抗生剤です。比較的新しいいろんな菌に効く構造の抗生剤です。我々は「DU 薬」と呼んでいます。ここで色々書くと問題もあるかもしれませんので、ネットで「DU 薬」と検索してみてください。

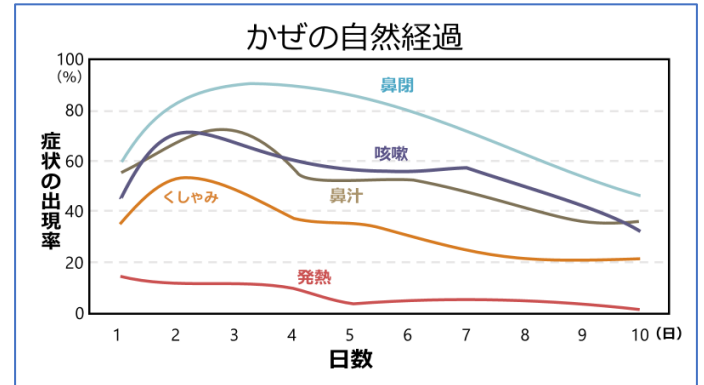
さらには今世界で問題になっているのは「多剤耐性菌」です。抗生剤の不必要な使用によって生まれた「多剤耐性菌」は様々な抗生剤が無効な菌です。究極の耐性菌は「スーパーバグ」と呼ばれています。耐性菌は決して特別な人しか持っていないわけではありません。実は社会の中にもう入りこんでいて、徐々に勢力を伸ばしてきています。でも「多剤耐性菌」は普段はなんて事のないおとなしい菌なんです。しかし安易な抗生剤の投与によって「抗生剤の効く素直な細菌」が死滅すると「多剤耐性菌」が勢力を増して悪さをします。

国立国際医療研究センターのアンケート調査では「43.8%の人がかぜに抗生剤が有効」と思っており「33.3%の人がかぜに抗生剤を処方する医者は『いい医者』だ」と思っていると報告されました。この結果の責任は我々医師におおいにあります。薬を処方してほしい患者に「いらない」という説明をするにはかなりの時間がかかることと「あの病院は薬をくれなかった」という風評を恐れる心理です。正しい知識を勇気をもって我々が今伝えないと子どもに害があるだけでなく子どもたちが生きていく将来の世界が耐性菌だらけになってしまいます。

子どものかぜが心配でなんとか早くよくなってほしい保護者の気持ちはよくわかります。心配ですよ。しかし不必要な薬を安心のために飲ませるといったことは子どものためにならないことを覚えておいてください。そしてかぜの自然経過を知っておきまし

よう。いったん症状が悪化して 3 日目ぐらいから症状は減ってゆき 5 日目にはほとんど熱はなくなります。鼻づまりや咳は長く続きますがけっして「悪化」や「ぶりかえし」を意味することではありません。

水分をとらせ、寒がれば温め、熱がれば薄着にして、安静にしてください。ぐったりしたら次の受診のタイミングです。



幼稚園にももの申す

幼稚園もこどもの幸せを望んでいるはずなのに本来必要のない処置や検査を保護者に、間接的に小児科医に求めていることを知っていてほしいです。

例としては「水いぼとってもらってこないとプールに入れません」「インフルエンザの検査を受けて来なさい。薬もらいなさい」です。

水いぼは少し時間はかかりますが自然に治る皮膚の感染症です。接触ではうつりますがプールの水ではうつりません。いつかは自然に治るのに皮膚にできるほんの小さなふくらみが目立つことから「うつされた」という話が出てくるんでしょうね。自然に治るものを恐怖でおののいて痛がる子どもを押さえつけてピンセットでとることに一体正義はあるのでしょうか？こどものためになるのでしょうか？

インフルエンザの診断は流行期には確かな目をもった医師であれば極めて容易です。「迅速検査キット」よりも迅速で正確です。しんどい子どもの鼻に綿棒を突っ込むことに一体正義はあるのでしょうか？

そして抗インフルエンザ薬は基礎疾患のない幼稚園児には不要です。幼稚園に我々はそれを伝えるべきがありません。で困った顔をした保護者と困った顔をして向き合います。

けが・事故

こどもの死因の一位は何でしょうか？皆さん漠然と病気の名前が浮かんだのではないのでしょうか？実は「不慮の事故」です。私自身は「不慮の」という言葉がつくのに不満があります。「不慮＝思いがけない」という意味です。おこりやすい事故は今の時代調べればすぐにわかります。その事故に備えることを知っていれば「思いがけない」事故で大切な子供の命を失うことは減るはずです。防ぐことができた事故でこどもを失った家族を何組も見してきました。ただ私たちはうなだれてお見送りするしかありません。

正しい知識を知ること

正しい知識・情報を得てください。その情報源もできれば確認してください。10年前の常識が現在の非常識になっていることもあります。情報源が新聞やテレビである場合も疑ってください。皆さんを不安に陥れるだけの偏向報道もたくさんあります。マスコミの情報が決して正しいわけではありません。そして保護者・幼稚園・小児科医はチームとなってこどもの将来を守りましょう。 （おわり）



講演内容のスライド→



役立つリンク集

病気



けが



DU薬

